

雪嶺集

〈宮坂静生鑑〉

遍路行きたし

小林 貴子



天に波ありて揺らるる葱坊主
羽となり矢となり刺さる春落葉
急湍へ声張り木曾の修羅落し
寂しさを逃げ出して来し螢鳥賊
雨粒のはじめが唇に遍路道
木の芽時道の神へと沓捧げ
眩しげにこちら見る人チューリップ
夏立つや海の光の装身具
健やかな声びんびんと軒菖蒲
じやれ合へるパンダ子パンダ花万朶

第五福龍丸展示館

佐藤 映二

春暁や醒めて木造まぐる船
真鍮の錆びしスクリュー寄居虫這ふ
甲板に降り降る花の塵ならず
「水揚ナシ」のモールス打電つばくらめ
東風恃むフルエンジンの七ノット
船腹の剥落つづく徂春かな

四季と折り合っ

佐藤 映二

「……皆さんの感情や経験を支えとして演奏を聴いてほしいのです。どう聴いてほしいか、私たちは言葉で伝えるのではなくありませんから」——E・ドゥ・ペンドラック
これは、若手の女性四人で組まれたフランスの弦楽四重奏団の来日を機に、第二ヴァイオリン奏者がNHKの視聴者に向けて話した言葉の一節です。
試みに、この言葉を、私なりに言い換えてみます。
「……皆さんの感情や経験を支えとして俳句を味わってほ

しいのです。どう味わってほしいか、私たちは俳句で伝えるのではなくありませんから」と。
よく言われるとおり、すぐれた俳句は読みかた次第で作者さえ思いもおよばない、さまざまな印象を読者に呼び起こす力をもっています。「読みかた次第で」とは、「皆さんの感情や経験」次第で、と言い換えられるのではないのでしょうか。
句会で選んだ句の寸評を求められたら、自分の感情を全開にし経験を総動員して、一句から涌きあがるイメージを思い切り、自分の言葉にするよう努めようではありませんか。